昭和三十年二月一日

財団法人人口問題研究会人口対策委員会
第二特別委員会第十四回議事速記録

財団法人人口問題研究会

財団法人人口問題研究会人口對策委員会第二特別委員会第十四回議事速記録

日　時　昭和三十年二月二日　午前十時開会

場　所　厚生省人口問題研究所々長室

出席者

委員長　寺尾琢磨

委　員　永井亨

〃　小山宗三

〃　北岡寿逸

〃　小坂冕見

〃　岡崎文規

〃　山本杉

幹　事　篠崎信男

坂本龍起

○ 寺尾委員長　それでは、たゞいまから移民対策委員会を開催いたすことにいたします。先般来、移民の問題について、専門家の方々のお話を承っております。きょうは坂本さんからお話を承ることにいたします。

○ 坂本龍起氏　私は昔、外務省の移民課長を満六年・おそらく外務省で一番長く関係したと思っておりますが、学問的に、あるいは統計とか、そういう研究を今までやっていないものですから、移民の実際についてのお話ということになるかと思いますが、移民問題というのは、すでに世界中が各国に頒屈いたしまして、一方の主权国から他の主权国に生活の根拠をかえるというのが移民だと思うのでございますが　その前は、やはり人間の移動というのは、人口問題から来てる人じゃないかと思います。私何かの本を読んだときに、マグナカルタのできる頃の、英国の人口は三百万くらい。今から七八百年前です。それから日本の鎌倉時代の人口が、当時の米の生産から推して二百何十万と、両方大体同じだったと思うのであります。それがたんだん人口がふえまして　英国の新大陸の発見　それからその後いろ人なことで、今日英国の系統を引いてる人口は、アメリカ大陸の、殊に北米人口の半分以上が英国の血を引いた連中ではないかと思います。それから濠州、カナダ、そういうものを含めましたら、おそらく一億五、六十万という数に達する人じゃないかと思います。日本は不幸にして　西欧と同じような個の発展とか海外発展というようなことが、あの足利時代に、たとえば倭寇とか、それに引続いて南方交易、従って西欧ではイタリアの地中海における　いろんな点と同じように、日本でも堺とか伝多というような一種の自由港的なものができ、それから土一揆とか百姓一揆というような、いわゆる德政というようなもの、それから一方聖フランシス、ザビエルが日本に来て、西欧の文化を紹介するというようなことで、たんだん日本も西欧と同じように浮氏ゐるというか　当時人口もふえて外に伸びざるを得ないような情勢になったのじゃないかと思いますけれども、不幸にして　秀吉たの

徳川のキリシタン禁制　鎖国というようなことになりまして　徳川時代に一種の産児制限が行われてあったのじゃないかと思うのであります。明治開国になって、国際社会の仲間入りができました。南米は大体スペインの子孫、これも南米全体といたしますと、統計はちょっと忘れましたが、人口は一億以上だと思いますが、そのうち、もちろん土人とか何かの血があって　純粋のスペインの子孫はどのくらいになりますか、これも相当な数字に達すると思うのでありますが、とにかく日本が世界の仲間入りしたとき、すでに全部がされく、その所属がきめられていて、主のない土地じゃないものでありますから、どうしてもいろいろな工作を要したわけでありますが　日本としては、いわゆる大陸政策といいますか、これは明治御維新後、ハワイの砂糖耕地にだいぶ日本人が移民として出かけて参りました。それから北米大陸の方でも、西部の鉄道開発に伴って、労働の需要が増して、日本人を連れて行ったわけでありますが、明治年代における日本人の出稼ぎ労働者の　向うの土地の風俗、習慣に合わないいろいろなことから排日という問題が起きまして、ふえる人口をどこかに持って行かなければならないというようなことが考えられたんじゃないかと思いますが　小村寿太郎というような人は　どうしても日本人は満州の方面に行くほかないというような考え方をもっておられたように思うのであります。とにかく日本は大陸政策というようなことで、人口問題ということを認識してやられたかもしれませんが　日本は明治開国以来大陸政策をとって来た、その結果、今度の大東亜戦争直前までにおける日本人の朝鮮、満州、樺太、それから支那本土、こういう方面における総数三百万に達しておった次第でございます。三百万人が、とにかく日本から出かけていた。

それから北米と南米とは、東アジア以外に、おのおの戦争前二十万ずつくらい。それから二十三十を入れれば、おそらく日本人の血を引いた者は、その倍以上ですから、百万近くいたんじゃないかと思います。そうすると　日本人は　明治開国以来、日本人の血を引いた、日本の発展というものは、人

口的な発展が四百万くらいだったわけであります。

これはよその国、英国とかスペイン、イタリーに比べますと、非常に数が少いわけでありますが、とにかく よその国の領土といいますが そういうものになった所に入って行くということは、非常にむずかしくて よくも日本人も四百万―― もっとも、それは曾っての 朝鮮、台湾、樺太という自国の領土になっておった所は 比較的発展しやすかったわけでありますが それから満州は日本の勢力範囲といいますが、殊に満州事変以来は事実上日本の延長みたいなものになったのでありますから、とにかく自国の領土外への人間の移住というのがいわゆる移民だということになると思うのでありますが、そうなりますと、移民の先行というものは、今日でもそうでありますが、ヨーロッパの延長社会なんです。北米及び南米というようなものは、ヨーロッパの延長社会、そこにいろんな移民問題としては問題が起きて来るわけであります。社会的に見まして、ヨーロッパの延長社会ですから、第一に言語の問題、風俗、習慣、伝統、文化、そういうものが 日本と隔離れて 日本の土地、生活様式というようなものは 世界で一番隔離れてるんじゃないか。支那あたり見ますと、支那人の生活様式は相当日本よりもヨーロッパに近いものがあるのですけれども、日本の生活様式というものは実に隔離れておるものであります。いわゆる今日でもブラジルあたりで数日前の私の方に着いたインプオメージョンによりますと、向うの移民当局、日本移民について、どうも日本人はあまり同化しないから、そうたくさん来られちゃ困るというようなことを言っておるようでありますが、戦争前の日本移民の中にはやはり国粋的な、軍国主義的な思想の影響を受けて、夜に向うに行っても、日本式なんて頑張ってる連中がいたのでありますが、今回ではそうでもないと思います。そういう従来の日本を保存しようというような特殊な国粋的な連中を除けば、誰しも向うに行けば 向うの違った環境に応じようと試みるわけではありますけれども、十代くらいの時に行っておれば、言葉は耳か

ら入って来るので、覚えやすいのでありますけれども、もう三十を越えたような人たちになりますと、なかなか言葉というものは簡単に行くものじゃありませんし、同化しようと思っても、事実上同化しにくいのです。外務省の人間でも、私ら外務省に入ってワシントンに行ったら、着いた日から日本語で喋れる。それから電報の翻訳とかやっておって、外務省に入ったって、向うの学校に入れてもらうとか、特殊な人は別でありますが、そうでなければ、なかなかできないですからね。いわんや移民で、三十を越えて一家率いて行った初代の才一世は、言葉ができなければ、同化しようにもどうにもしにくい。同化する気持はあってもできない。だから外国人が日本人をつかまえて、日本人は同化しにくいと言うのは、少し私は酷だと思うのですね。これはこの間　カトリックの国際移民会議というのが去年九月に、オランダにあったので、私は資料をいたゞき、計数と同時に、日本移民についてそういう非難をしたんですが、根本においては日本人だって人間であるし、人間性を持ってるから、周囲に適応しようと思うのだけれども、言葉というものの不便があるので、日本人は西欧移民よりも時がかゝる、だから、その時のかゝることさえ見てもらえば、日本人は同化しにくいとは言い得ないという非難をしたんですが、事実上言葉が非常に障害をなしておりますし、また現に日本人で向うに行って、特に努力して言葉を早く習熟したような人は、大体成功しております。南米における成功者はみな言葉ができております。また同じ西欧社会の延長であっても、北米はアングロサクソン系統のプロテスタント系統ですが、南米はカトリックですし、それから大体ラテン民族というものは、アングロサクソンよりも、人種的偏見は少いのじゃないかと思います。そこへもって来て、カトリックですから、割に日本人なんかに対しても、そう変な考えをもつ人が少いので、日本人が少しでも向うの言葉を覚えるようになれば向うの人が親しくしてくれますから、従って成功もできやすいわけであります。

それから習慣の違いといいますか、ちょっとしたことですが、滑稽な話なんですけれども、ブラジ

ルで、向うの人に不幸があって、親しい近所の日本人も集った。ところが、日本式にお酒を飲んで酔払って喧嘩したというのですね。それでもって、ブラジル人が、日本人は非常にいい人間だと思っておったら、人の不幸に際して、悲しむどころか、酒飲んで喧嘩する、こんな連中かたくさん来られちゃ困るというようなことで、また排日の一の材料にされたというようなこともあるのでありますが、これなんか下らぬことであります。

それから北米ですが、昔、明治四十四年ですか、サンフランシスコの日本学童排斥問題がありました。これなんかだって、おそらく、これは初の行った移民の人たちですから、子供に弁当もたせるのに、握り飯を持たせてやったものです。何しろ七つ八つの子供ですから、御飯粒をこぼす。たまたまそこへ白人の学童の親が参観に来たんですね。それで、こんな者と自分の子供と一緒にされちゃ大変だ。これがサンフランシスコにおける日本学童排斥の端緒になったんですね。下らないことですよ。考えてみますとね。そういう問題があるわけです。これは根本的に日本人の生活様式という問題にまで触れて行きますし、ヨーロッパの延長社会の伝統、生活様式の差、そこに日本人の移民として非常に大きな障害があるわけであります。またそういう下らないことをつかまえて、向うの国が政治問題に利用されるわけであります。

それから経済問題も、まさに然りで、日本人は勤勉であると言われますが、同時に勤勉が過ぎて、向うの連中が、店を何時なら何時に閉めるところを、日本人の店はそのあとまで開いてるというようなこと、そういうものが、すぐ向うの経済問題となって論議されますし、西欧移民が自国の延長である地方へ移ります場合に比べますと、日本の移民の場合は、いろんなことに注意してかからなければならぬということが、日本の移民推進の上の一つの大きなハンディキャップだと思うのであります。それから同時に、西欧でも昔、海外に発展した場合には、何かそこに指導者があるなり、さらに通

って、西欧の新大陸への発展というものは、3Gと言いますが　ゴールド、グローリー、ゴスペル、というものが伴ったわけであります。グローリーというもので、一種の指導者が伴って行ってるわけです。日本の移民について申しますと、特に深い、何か海外発展というか、外国へ新天地を開くというような、何か哲学といいますか信念といいますか信条といいますか、そういうものを持って、移民のリーダーになるような人は、従来あまりなかったのです。本質的に移民というものは、現状に甘んじなくて、日本内地で事業に失敗したとか、あるいは土地とか金を持っていない人たちが外国に行けば、土地も持てるし、金も稼ぐし、成功のチャンスはあるだろうというようなことで行くわけでありますから、現状に甘んずるような人、中流以上の人というような者は、本質的にはなかなか外国に行かないです。よほど深い何か考えを持って、新天地を開拓しようとする人は別ですが、そういう人が従来なかったのです。ですから移民というものは、日本社会においても割合に貧乏であり、下層な人であり、見ようによれば一種の弱者、そういう者だけを従来送っていたわけです。それから私ども、外務省におった経験からすると、ほんとうに移民を推進するには、やはり有力者が出て行くということ、それには今日としては、有力者というものは私は企業の形で出て行くんじゃないかと思います。

移民を推進するには、やはり資本の進出、企業の進出というものが伴わなければ、たゞ数を送り出しても、それでは比較的成功のチャンスが少いんじゃないか。もとより今言ったような腕一本、脛一本で行った人で成功した人はたくさんありますが、しかしその成功も、外国人の非常に大きく成功した人と比べれば問題にならない。日本の現状から見れば、腕一本、脛一本で行った人が、何千町歩の地主になり、自動車を持ち、トラクターを持ち、テレビジョンも持っており、さらに飛行機を持ってるという人が、ブラジルで二、三人くらいあると思います。自分の農園内に飛行場を持っている。それは日本式に考えて大成功なんですけれども、しかし西欧移民の大成功者に比べれば問題にならない。

それでもそういう成功した日本人が、向うに行って獲得した資産というようなもの、土地など、計算してみたら、これは相当大きな金額になりますし、従来ずっと昔は、政府は移民に金を貸したり、補助などしていませんでしたが、大正の末期、昭和の初めの頃からだと思いますが、移民の渡航費を政府が補助するようになった。その後政府がそのために支出した金は、相当莫大な投資といいますか、金額になりましょうが、日本の移民が向うで得ているものに比べると、この投資は償ってる人じゃないかと思いますが、そういう意味からして、私は依然として、やはり裸移民といいますか、資力のない人でも政府が補助して送り出すということは、大きな国家経済という見地からすれば、十分ペイしてると思いますから、依然として続けてもらいたいと思うわけです。また継続する価値のあるものだと思います。

それから相当日本人が次第に地盤を張り、また日本人の数もふえますと、どうしても自国の品物をほしがりますし、またそれに伴って外国人も日本品に対する認識を深めて参りまして、移民はやはり貿易上にも一つの大きな効果をもたらし、自分自身で財産を獲得するのみならず、日本に貿易上の利益をもたらし、さらに親類縁者に対する送金、そういう利益もあるわけです。

さて人口問題とどういう関連があるかと申しますと、これは先に申しましたように、欧米延長社会である北米、南米では、戦前二世三世を入れて百万人くらいのものであります。それから私が移民課長をやっておりますときにブラジルへ出ましたのは、一番盛んなときに年二万二千人くらいでした。もっともわれわれの話によりますと二万三千と言っておりますが、外務省の統計では二万三千だと思います。あのとき船が約一万トンの船が十ぱいで、年に二十航海、それで二万三千出したのであります。その時の例から、それからその時はブラジルだけでございましたけれども、今后見通しを立てることはたいへんむずかしいですけれども今後二万から三万、外務省の努力では私は二万から三万くらい将来年に出し得る人じゃないかと

思います。その程度ではこれは直接人口の圧力の緩和ということにならぬと思います。しかし心理的の影響は相当大きいと思います。殊に単独青年なんか出るようになりましたら、農家の次三男というような者に希望を与えますし　心理的の人口圧力緩和ということについての効果は、非常に大きいと思います。そういう心理的の効果ということになりますと、さらにわれわれとしては、日本移民排斥の規定を持っている濠州とかニュージーランドとか、そういうものに呼びかけて、事実上は日本人がそんなに行かないような、自制の手段を、当初のうちはとらなければならぬと思いますが、しかし一応排斥規定がなくなるということ、また心理的な効果が大きい人じゃないか。そうして僅かでも濠州とかニュージーランドとかに行けるというような先例が開けましたら、これも一つのやはり圧力緩和になる人だと思います。これは手前ミソになりますが、この問題について人口問題研究所から統計をいただきまして、去年のカトリックの国際移民会議に、日本では優生保護法のもとに　堕胎というものが合法的に堕胎が、最近においては約百万だ、カトリックでは堕胎は殺人ですからね、百万人の殺人を、しかも法律をつくってやらなければならぬようなことは、これは一体どうしたことだ、これは日本だけの問題でなしに、これは人類全体の問題であり、責任じゃないかというようなことを遠まわしに書いてやったんです。カトリックのペーパーに、去年の九月に出したんです。なおその移民問題については、いろいろな統計を送ってやりまして、遠まわしに、満州事変、次いで今度の太平洋戦争というものは何故起きたかということを、遠まわしに、日本の人口増加、しかも日本は資源がなくて、外国から原料を輸入して、そして工業によって立って行かなければならぬ、同時に一方、移民というものによって立って行かなければならないのに、いろんな通商上の排日、それから北米の排日、それにひっかけて、古来各地で排日的な風潮が起き　一方支那では　三民主義あるいは民族主義に基いて排日が非常に盛んになった、満州事変というものは、起るべくして起きたんだ　それに次いでさらに

日本の発展が押さられることによって、大東亜戦争になったんだというようなことを遠まわしに書いてやりました。そうして百万からの殺人を敢えてしなければならぬというのは大変なことだ。それが非常な反響を起しまして、みなびっくりしまして、豪州とかニュージーランドの信徒なども、自分のところにも排日規定があって、なかなかいろいろ政治問題やなんかで急速には行かぬけれども、われわれもひとつ運動しますと言っておりますし、同時に、日本としても民間の声と同時に、公式にも機会ある毎にそういうことを言え、ということを誰か言っておりました。それで移民問題は、結局、今日ではやはり、外交問題でもあるわけであります。一応このぐらいにしまして、あと御質問があればお答え申し上げたいと思います。

○　北岡委員　渡航費の補助は、現在どうなっておりますか。

○　坂本龍起氏　渡航費は、補助でなく、貸付けるという形になっております。大体十一万くらいです子供は半額です。それは船賃の実費です。

○　北岡委員　それから、ブラジル政府からは何もないのですか。

○　坂本龍起氏　何もありません。ただ、向うに着いて、向うで独立する場合に、独立して何かいよいよ始めるときに、政府の関係のある銀行から、ある種の融資を受けられます。それから所によっては、種子とかそういうものを無料にしてくれます。それから向うで移民の合宿所みたいなものを建ててくれてる所がありますし、それから食糧なんかについても、相当いろいろ便宜をはかってくれてるようです。地方によって多少違うようでありますけれども、入った当初一年くらいはそういうことがあります。

それからブラジルの問題になりますが、ブラジルではやはり、日本移民排斥ということは特にないようでありますけれども、何しろ西欧の延長社会といいますか親戚同でありますから、たとえば、イ

タリー移民についてずいぶん非難があったり、すいぶん肩の悪いのがいる人ですけれども、悪いは悪いとして　向うでも論議の所になりますけれども　それかといって、イタリー人移民を排斥して、日本人を入れてやろうという空気にはならないのです、そうして一番遅んでるサンパウロ方面なんかはもう人間が多すぎるんで、しかも都市に人が集まりすぎるし、母金の農園なんかは　できれば日本人でなしに、西欧の移民を入れたいということで、どうもサンパウロ方面には、あまり日本人が来てほしくないというような空気があるのです。来ても　呼寄せというような方法であまり目立たない方法で来てもらいたいというような空気が強いです。日本人を大量に入れるということはあまり、西欧移民が好まない。奥地の開発という方面に向けたいということで、実はアマゾン方面に五千家族それから中部奥地に四千家族、それを向う五年間ですかの間に五千と四千家族、計九千家族入れることを認めておるのですがね。

○　北岡委員　いつでしたか、認めたのは。

○　坂本龍起氏　一昨年です。それは、アマゾンは辻小太郎、中部奥地は松原安太郎君に、個人的に、その個人に入れてもよろしいということを認めたものであります。それからボリヴィアという国が、今すでに沖縄から四百人行っておりますが、ボリヴィアではこちらから旅行して行った今村忠助さんとか、外務省から　行った　岩村　君に対して、両人おいでになってもかまいません。しかしわれわれの方にお金はないから、開拓のいろいろな計画は、自弁というか、日本側でやってもらいたい、向うへ着いたあとの地方へ行く運搬だとか、できるだけのことは自分の方でやるけれども、開発の具体的なことは自分でやってくれ、ボリヴィア政府として開拓計画を立てて、自分の費用では入れられないから、それさえやって下さるなら、いくらおいでになってもよろし

い。公有地もありますし　私有地も非常に安いからと言っております。それから西インドのドミニカ
とゞう国、これは現在大統領をやってる人の兄さんで、前の大統領で、同時に有名な将軍ですが　そ
の人がなんでも自分の娘に、日露戦争のころ生れた娘に、パポネサ（日本人）という名前をつけるく
らいに親日感情の持主で、その人が日本人を一万人とか　二人人とか入れてドミニカの農業に従事させ
たいということを言い出しています。それはしかし、そういう有力者の言うことは、一つの考えであ
るだけで、どういうふうに具体化していたゞけますか、具体化させるように日本側でつゝいてるん
ですけれども、それから大統領も、この間、矢口参事官、上條君などが会ったとき、やはり賛成で、
入れようという話になっておるのですけれども、なかなか実務がスムースに行っておりませんが、こ
こなんかは、ある程度行けるし、実現するだろうと思います。

それからコロンビアという国が、大量ではありませんけれども、少量は入って行く見込みがあると
思います。それから中米方面でもある程度入って行けますし、アルゼンチンも、今の大統領のペロン
なんか親日的な感情は持っておりますが、やはりあそこの憲法が、ヨーロッパ移民を優先的に入れる
という規定があると思いますので、ですから大量には行けません。

それからパラグアイは非常に面白いと思います。現に日本人が、何十家族になりますか、数にして
四百人くらいおります。これは国全体の人口が確か百五十万くらいでございます。そうして広さは日
本よりもずっと広いですから土地も比較的よさそうであります。だからこゝには相当入り得ると思
いますが、これもやはり向うの国としては、いろんな開発計画を立てゝくれませんから、やはり自力
で開発して行かなければならない。それやこれや考えまして、日本で相当な資金的な計画が立てば、二
万から三万は、毎年送れるだろうと思っております。しかし結局一番行きやすくて　将来大量という
か、やりいいのは東南アだと思いますね。ニューギニア、ボルネオ、フィリピンのミンダナオ、こうい

う方面が日本から近いし、実際問題として……。

○ 北岡委員　米を作れば、日本の食糧問題も解決しますからね。

○ 坂本龍起氏　しかしフィリピンを初めとして、ニューギニアなんかについては、戦争中、われわれの想像を絶するような乱暴なことを日本側がやってるものですから、反日感情はなかなか急には払拭できませんから、東南アの開発にしたところで、日本人がどんどん入って行けるという時代は、いつになりますか、相当先のことだろうと思いますね。

○ 北岡委員　賠償するんだと言って……。

○ 坂本龍起氏　まあ、それともひっかけてですね、ところで根本の問題は、移民として行く人に、昔と違って、りっぱな民主々義的な人間として行ってもらうことです。しかしこれは結局、国民全体が民主々義を本当に理解し、民主的な人間になることが前提になるわけです。そして国際的な視野の開けた人間として恥しくないものができ上るようにならなければ、むずかしい問題ですがね。移民だけにりっぱな民主々義になりなさいと言ったってだめな話であります。日本国民全体がそうなれば、わのずから移民もそういうことになるわけです。

○ 永井委員　それにしても、やはり事前に移民を統一する必要はあるでしょうしね。

○ 坂本龍起氏　それはあります。われわれの方で、今計画しております。

○ 永井委員　あなたの御関係の海外協会連合会の御事業の一班を聞かせていただきたいと思います。それに関連した問題も一緒に伺いたいのですが。

○ 坂本龍起氏　たゞいまのところは、外務省の方でブラジルについては、アマゾン方面に何人送り出せ、南伯の方に何人出せというということを、その都度、外務省の方から指図を受けるわけです。そうしますと、それを全国の海外協会――私どもの下部組織といいますか、下部団体である各県の海

外務省または県庁に、こういう資格の人を推薦するから選考してくれということで、北のアマゾンの方へ行く人は、農業移民といいますが、農業に経験を持ち、農業の知識を持ってる人、しかも夫婦及び労働力のある家族、つまり五十才未満十五才以上の者、つまり働ける者が三人以上、労働力三単位というのですが、そういう三人以上の家族、それを何家族ほしいと外務省から言って来ますと、それを全国に流しましてそれに対して私の方へ書類が来るわけであります。十家族というところを十五家族くらい言って来ますと、まず書類によってわれわれの方で、こういう人は向うの資格に合ってるということで、十人を決定をして、それに対して、旅券の手続とかいろいろの手続きをしてやりまして、船の出る前、約十日前、神戸に政府の移住あっせん所というものがあります。そこへ入れまして、そこで一応ブラジルの事情とか、ブラジル語とか、そういうものを僅か十日じゃどうにもなりませんけれども、この十日間にいろいろ話をして、そうして船に乗せてやる。それから渡航費は政府が貸付けるということで、その貸付は船賃でありますから、事実上は、移住者から私らの方へ金幾ら幾ら拝借しましたという書面をとりまして、船が出たあと、その船賃を私の方でまとめて船会社に渡してやる、そういう仕事をやっておるわけでございます。

それで各県に対しては、できるだけ行きたいという希望者に面接してくれ　面接して、あなた方がこれは人柄が良さそうだ、この人ならブラジルで排斥されぬだろうという人、それから、できるならおかみさんに会って、移民というものは、特に奥さんがしっかりして、苦しいときに御亭主を鞭撻してあげなければならないし、子供の世話から家事から、とにかく奥さんが非常にしっかりした考えを持ってる人でなかったらできないから、できるだけ注意して面接してくれということを、地方の海外協会にお頼みしてるわけです。海外協会も最近は非常に熱心でございまして、なるたけ質の良い者を選ばなければということで、最近はあらかじめブラジルに行きたいという希望者を募りまして、書類

をとって、いざというとき、いつでも出掃けられるようにということで、今やっておりますが、私まだ全国は廻りませんけれども、関東、東北を廻ってみましたところでは、非常にそういう点を選ぶということに対して気をつけております。

それから一番困るのは、トラホームでございます。トラホームは向うでは非常にやかましく言いますし、日本の農村にはこれが非常に多いです。それで厳重に調べてトラホーム患者はいかぬということになりますと、相当数が減るわけです。それで軽い程度の者は、今のところ出しておりますが、この間北海道大学の先生がブラジルの田舎を廻られて驚かれたのは、日本人のおるところ非常にトラホームが多くて大変だという話をしておりましたけれども、厳重にされたら送り返されますから、われわれとしては、向うの検疫官にトラホームを大目に見逃してもらうように、いろいろ工作してるわけです。船が向うに着きますと、検疫官がやって来ます。すると船のドクターがいろいろお世辞をつかったり何かして、あまりやかましく言はないようにいろいろ工作をしておりますが、その工作が通っても、田舎ではあるし、なかなか眼のお医者さんなどおりませんし、放りぱなしにしておるので、それが蔓延すると、日本人のいるところはトラホーム部落というようなことになって、行ってる日本人自身が気の毒でありますし、また日本移民の排斥をやろうと思えば、いくらでも向うに口実を与えることになりますから困った問題だと思います。なにしろ、日本の農村は、三分の一がトラホーム患者で、農村病です。これも非常に大きな問題で、私ども弱っております。

○　永井委員　ほかの病気はどうですか、結核その他は。

○　坂本龍彦氏　結核もやかましく言っておりますが、あまりないようです。これは向うで労働しなければならぬことがはっきり判っておるものですからね。

○　寺尾委員長　一体そういう集団的な移民を計画しながら、向うに行ってからの、そういった往生上

の保護のような問題について、私まだ一度も伺ったことがないんです。けれども、何かやってあるのですか、送るには送るけれども、あとはそれっきりだ。これでは移民じゃなく、棄民だというような非難も大分あるようですが。

○ 坂本龍起氏　皆は　私が課長をしてるときに、日本人の集団している所には、必ず学校と病院を、大蔵省にやんやと言って経費をとりまして作ったんです。それが戦争によって向うにみんな接収されまして、今は向うのものになっておりますが、今新しく入ってる所、そういう所へは、向うは学校、病院を建てることになってる人です。建前は、向うの開発計画によりますと、そうなっているんですが実際問題になると、予算が途中で誰かのポケットに入れるというようなことがあり、それからブラジル人、南米の人というものは、よく接拶に、何でも「あした」とか「あしたまで」ヘアストマニアーナ」ということを言いますが、それは実にのんびりしてるんですよ。ですから政府が移民を奨励するなら、そこまでやらなければいけませんが、実際問題となると、あの広い所に日本人が入るというと、日本人のもらってるのは四十町歩で、大体一キロに一軒すっくらいなので、とても広いですからね。それで日本で考えるようなことは、ちょっとできないですね。それにしても、とにかく何キロ行けば病院があるというようなことをやりたいと思ってはいます。それが今のところ政府も戦政余力がないものですから、結果において、棄民ということになってしまうんです。

○ 寺尾委員長　一つ伺いたいことがある人ですが、初めに、坂本さんは移民というものが経済的にペイするものだということをおっしゃいましたが、過去のブラジル移民は大体ペイしたと思いますが、問題は、あの時には非常にコンディションのいい移民であって、場所だって、サンパウロの方で、コーヒーの栽培で非常に恵まれた移民であった、戦後においては、ああいう移民は一切封鎖されて、

アマゾンのジュートあるいは米。そんなものですね。ああいうものが、果してどれだけの有利性を持っておるかということについては、これはまだほとんど研究されていないんじゃないかと思うんです。自分が食うだけのものならできるかもしれない。これは移民が有利だと、はっきり人に言えるような条件にあるかどうか、この点どうですか。

○　坂本龍起氏　大体アマゾンだけですね。問題のあるのは。あとはパラグアイにしろ、ボリヴィアにしろ、ドミニカにしろ、これは入れる場合に、経済的、社会的、それから自然的な条件を調査してからでなければ、アマゾンは私が外務省で課長をしてるときから実に疑問なんです。あそこは、東南アあたりと違って、土壌はあまりよくないと思う人です。いい所ならあれだけ西欧社会の延長であり、白人が入り込んでる所を、どうして長い間放っておいたかということなんです。それから調査は白人の方でもできていないようです。その点においては、まだ残されてるものはあるわけです。ところが、アマゾンと一口に言っても、あの地域は、青森から上海くらいまである間を一万トンの船が行くのです。そういう所に、ポッリポッリと日本人を入れることは、実は疑問なんです。大資力をもって、大開発計画を立ててやったら、これはまた別ですけれども、だからその点は私今、日本海外協会連合会でタッチして、アマゾンに政府が入れるから送ってるけれども、私自身は実はまだ確信をもてないし、不安がある人です。

○　寺尾委員長　最近向うに行って、どうも思わしくないから帰りたいけれども、旅費がないというので、何か義勇軍の募集なんということをやり出して問題になったということがあったようですね。

○　坂本龍起氏　それは、アマゾンじゃないでしょう。

○　寺尾委員長　ブラジルです。

○　坂本龍起氏　それでは、戦争中の勝組と負組の争いの問題です。

○　寺尾委員長　いや、最近伝えられたので、ごく最近のことらしいです。

○　坂本龍起氏　どうも、あそこには、不良といいますか、変な連中が、ブラジルにはたくさんいるんです。サンパウロのインテリ、ゴロというのは、つまり政府の渡航費で行った人でなく、その前の人たちにはいろいろな手合がいまして、殊にインテリというか日本の中学ぐらい出て、そのころ日本に反感をもち、何か日本から逐われるような気持で来た人たちが、ます新聞をやり、そうしてこの人たちは、移民というか、在留民に寄生してるわけです。そういう連中がいまして、外務省の中で一番世界中でむずかしいのは、サンパウロです。支那あたりは領事裁判権を持っていて、権力を持っていましたから、どうにでもなったですけれども、あいう所は権力はありませんし、日本人の問題だから向うの官権は面倒くさがってタッチしませんし、ますます日本人の変なやつがのさばる。新しく領事で来たりすると、ひとつとっちめてやろうぐらいのことで、手ぐすね引いて待ってる。そういう手合のいる所でして、そこへ軍人の古手か何かで、拓務省から行った連中で変なのがいまして、変に国粋的な人です。その連中が、無知じゃないが、比較的低い移民なんかをおだてたり、金を巻上げたりする人です。

それが戦争中でしたが、戦争直前でしたかに出た日本の札が、だいぶブラジルへ流れて行って、それを日本人に売りつけた日本人がいる人です。そのとき、日本が勝って、この金を持ってれば、随時日本に旅行できるとか言って売りつけたことがある。

それがそもそも勝組、負組の発端の動機なんです。ずいぶん悪いやつがいる人です。せっかく田舎でコツコツ働いて金を貯めてたまにサンパウロに出て来ると、上手に誘惑して、バクチなどやらして金を巻上げるというやつがいる人です。

○　寺尾委員長　それからもう一つ伺いたいのは、さき心理的な効果ということをおっしゃいましたね。

よく移民の問題に関連して移民というものが、人口問題の直接の解決にはならぬけれども、心理的には非常にいい効果がある。こういう説を私たちよく聞かされる人ですが、心理的効果というものは、私は漠然と考えて、二つあると思うんです。一方は、移民というようなはけ口ができたからといっていわば過剰人口の圧力に対する不安といいますか、そういうものが少くなって、従ってそういう面から来る社会的な不安というものが少くなる。国内不安がそれでよほど緩和できるという面ですね。これは確かに一面にあると思います。他面ではやはり私は、これは先ほど坂本さんがおっしゃいました通り、日本は非常に人口の増加に弱ってしまって、百万の堕胎が行われるというような追詰められたところに来ておる。これは現在、厚生省あたりでは、その方法では面白くないからというので、避妊の方へ置きかえようと努力しておるわけですね。そういった努力が、微力なものになって行かないか、そんな必要がないんだ、なにも出生をチェックする必要はないんだ、生れれば移民で出せばいいんだというような考えが、やはり心理的に動きやしないか。片っ方は、二三万の移民が、今のところまだその見込もないですけれども、うまく行って、その移民が一方において行われるけれども、他方においては、出生の方はずっとふえてしまう、これは人口千人について一だけ出生率がふえたって、たちまち八万も九万もふえるわけですから、そっちの方が逆効果になる虞れはないでしょうかね。

○ 坂本龍起氏　一番大きなのは、とにかく日本が共産化なり、戦争前は外に向っての爆発ですが、そういうものの口実に利用されますがね。日本人を排斥してるということはつまり向うが日本に向って憎悪を表示してるわけですからね。国際的の問題の方が、心理的の影響というものが私は一番主じやないかと思います。私の言ってるのはそういうわけですけれども、向うが憎悪を表示する。こちらも憎悪を表示する。太平洋戦争の原因というものは、日本移民排斥あるいは日本人に対する一種の国際的の憎悪というものが、今度は日本をしてまた逆に憎

悪というものが、敵対的な感情をもたせるという、国際平和の上から言っても、非常に大きな効果がある人じゃないかというわけです。それは間接に、人口の圧力不安の低減ということになる人じゃないかと思います。

○　寺尾委員長　しかしその問題だけでしたらなにも移民という形でなくても、たとえば通商の自由というようなもの、むしろそっちの方が手っとり早い問題であって、移民に対して門戸を開かなければ外国が憎悪を感じてるんだと言ってしまったんだが、少し論理の飛躍があるように思うんです。なにしろ向うは自分の領土なんだから、そう外国人をむやみに入れるということはあり得ないわけです。

○　坂本龍起氏　そう、差別待遇の撤廃ということですね。　人口問題でなしに、一種の外交問題になって来るわけですけれどもね。

○　寺尾委員長　ここは人口の対策の委員会でして、移民問題が一体人口の圧力の緩和に一体役に立つかどうか、どの程度役に立つかということが主体であって、それ以外の観点からの移民ということは、直接のわれわれの問題になっておらないわけです。日本人の労力で他国を開発してやるのだから日本人の尊い仕事だというような人道主義的な観点からの移民というものを、もし考えれば、これはなにも否定する必要はありませんけれども、たゞここゝで問題にしてるのは、相手の元手を使って、実際の人口の圧力の緩和に役立つような移民というようなものがあれば、可能かどうかということなんです。

○　坂本龍起氏　これはむづかしいですね。

○　北岡委員　フォードがアマゾンで大きなコンセッションをもらったが、あれはどうしましたか。

○　坂本龍起氏　廃棄して、今ブラジルに譲渡しております。

○　北岡委員　非常な損をしたわけですね。

○　坂本龍起氏　損しました。

○　北岡委員　その原因は、土壌が悪いんですか。

○　坂本龍起氏　原因は、一番悪い所を選定したわけです。雨量が少いということらしいです。それから土壌もあまり良くない。

○　北岡委員　在住施設などに金がかゝるんですか。

○　坂本龍起氏　それもありますが、東南アは労力が非常に安いでしょう、ブラジルはこっちほど安くない上に、あのアマゾン辺りの土人なんか、うんと給料をもらって、金があればもう休んじまうんです。

○　北岡委員　どれが一番大きな理由ですか。

○　坂本龍起氏　労力問題ですね。

○　小坂委員　僕が行って聞いたところでも、やはり雨量が少いと言っていましたね。つまりアマゾンの上流の奥らしいです。川沿いは割合に雨量がないんだそうです。それが一番大きな原因だと言っていました。

○　坂本龍起氏　奥のエキストズ、オー次大戦の時分に、日本人が千人くらい入っていた。天然ゴムに。非常にゴムの値が高かったですから。だから、奥の方は割にいいと思いますが、アマゾンは疑問を持ってるんです。

○　小坂委員　割合によい土地がないですね。アマゾンは。それでまたフォードのゴム園つくった支流ですが、大体シヤワでもそうですが、河の水の濁ってる所は、土地がいいんです。きれいな水が流れる所は、土地が悪いんですよ。ところがフォードのゴム園のある支流というのは、とてもきれいなんですよ。やはり土地が悪いんですね。

○　坂本龍起氏　しかし今の心理的ということですが、どれだけ人口問題の圧力緩和になるかということは、よほどいろいろな数字を出し、いろいろ検討しないと、簡単には言えないでしょうね。常識的

には　一万出ればいいところじゃないですか。

○　北岡委員　それは一万人死んだと同じことだ。そんな考えじゃ移民なんかやる氣がしない。伝染病で一万人死ぬと、移民一万人と同じだというようなバカなことはないので、やはり移民は民族の発展でね。

○　坂本龍起君　人口問題じゃなくなって来るね。

○　北岡委員　そういう意味なら非常にあるわけです。一万人が死ぬことと、一万人が向うに行って成功するのとは比べものにならぬのです。

○　坂本龍起氏　そういう意味からいえば、非常に意味があると思いますね。

○　永井委員　寺尾さんのおっしゃる虞れは相当にありますよ。

○　寺尾委員長　三万人をブラジルに送るとすると、さっきの坂本さんのお話によれば、とにかく三十億円以上の金が渡航費だけに要るわけですね。只じゃ送れないです。経済問題として非常に大きいです。年に三十億といえば、今の予算がいえば、大したものじゃないですけれども、しかし社会保障費その他から考えてみますと、三十億という金は、相当日本ぢゃ大事な金なんでね。それを移民というものに使う方が、今のなけなしの金を使う方法としていいかどうかという問題なんです。

○　北岡委員　バランスの問題はありますけれども、移民はやはり希望を与えると思う。宝クジに当るのは何万人に一人といってもそれでも売れるでしょう。

○　小坂委員　それから向うから入る金があるわけです。

○　北岡委員　これはやっぱり経済のエキステンションですからね。

○　坂本龍起氏　そうです。日本の飛地が西欧社会の中に生れるわけですからね。それだけ日本が延長されることになりますからね。

○　北岡委員　三十億出すとおっしゃいましたけれども、日本に払うのだからね。油くらいは外に払うけれども、大部分は大阪商船に払うんだから。商船を造ったのも日本人だから。それをしなければ、みんな遊んでるわけです。

○　寺尾委員長　イタリーあたりどういうふうになってるんですか。イタリー移民は非常に多いわけですか。それが向うにおるために、イタリーの産業というものが、どれだけのプラスを受けておるかということですね。

○　小坂委員　イタリーは戦後ブスペルが、移民を第一の国策にしたわけです。二十万出そうとしたのが四十万くらいふえて、今十五万くらい出しておりますが、これは儲かる人です。家へはどんく外貨が送金される。これははっきり儲かるものだからやるんです。

○　寺尾委員長　そんなに昔からの移民を考えたら、大変な数でしょう、イタリーはヨーロッパの諸国の中で特に貧乏国ですね。その理由はどうもわからない。

○　北岡委員　イタリーという下半分の民族が、あれだけ保ってるのは、移民のおかげですよ。

○　永井委員　その通りです。

○　北岡委員　イタリーなど人間がガタガタですよ。

○　坂本龍起氏　季節労働で、フランスにはドイツ、イタリーからどんどん入って行きます。

○　永井委員　ヨーロッパの出稼ぎ労働者の送金は相当なものです。

○　山本委員　イタリー移民の数はどのくらいですか。

○　小坂委員　増加が四十万、それに二十万出している人です。実績は大体十五万です。

○　山本委員　外にいる人は……。

○　小坂委員　これは何千万でしょう。とにかく多いです。アルゼンチンだけでも三百万いますしね。

○　北岡委員　ニューヨークにも百万以上おるでしょう。

○　永井委員　それから小坂さん、さっき伺ったことに関連して、こんど千五百万ドルの借款ができましたね。　それはどういう御計画か、お差支えない程度でひとつ。

○　小坂委員　これはまだ決っておりませんけれども、大体の計画は今問題は現地で、たとえばブラジルに移民を送ってくるでしょう。ところが、ブラジルに送ってるのは、向うに連邦植民地というのがあるんです。つまり、日本の国内開拓のようなことを、向うの政府がやってるわけです。それが奥地の開発をやろうというので　植民地事務所をつくって、道路をつくったり、土地を用意したりやってるわけです。それで日本移民を入れたりうまく行くだろうと向うで考えたわけです。そこで日本が戦后移民を送りたいという希望があったわけです。日本は現地に外債を出してまで、そういう施設をする金がない。そこで話があったわけです。そして戦后の移民は出ておった。ところがそういう形でやると、向うにやはり制約、条件がいろいろあるわけです。それから土地も、アマゾンの奥とか、あまり便利のいい所はない。どうしても現地で土地を買って、ある程度の施設をつくって日本から送る。つまり日本側がイニシアチヴをとって、いい土地を買い、いい移民をやりたい、移民をやりたいというわけです。それで現地でなく、資金を外債で調達しようというのがアメリカのものであって、千五百万ドルがきめられたわけです。結局、その千五百万ドルで、現地のそういう施設に、土地を買ったり、交通の便のいい土地を買って家をつくり、入ってもらえるような施設をつくってやろう。それに使う意味できまったわけです。今それに対して、どう運用するかという問題で、結局、海外移住公社のようなものをつくって、東京に小さな本店を置いて、現地のブラジル、アルゼンチンとか、相当移民を送れる国に支店をつくって、それにやらせようという構想です。だから、ほとんど外の関係だけです。使う金は。向うの受入態勢です。

○　永井委員　そういう所で、さっき幸尾さんから御質問のあった、向うの在住とか、教育とかいう施

設は、それでもってある程度までできるんですか。

○ 小坂委員　ええ、補えますね。教育なんか　ブラジルでも学校つくったり、いろいろやってくれますし、それから衛生施設も相当今完備していますからね。すぐ向うで手を伸ばしてくれます。衛生とか、教育は、あまり問題はないですが　一番困ってるのは、自由にいい土地が買えないことです。それから、行っても、向うの連邦植民地が、十分の用意がない。それに対して、補いが直接こっちから金を出しても　なかなかやれないと　いうところに悩みがあったのです。

○ 北岡委員　さっきの話ですが、日本の増加人口のために、わずかではあっても、例は実相手もないかもしれませんが　日本の公営住宅、あれは千人に一人とか、何人に一人しか当らない。それでも希望があるでしょう。よした方がいいということにはならないと思います。それと同じことですね。もちろん普通の自営の住宅も建てなければならんけれども、やはり公営住宅もあった方がいい。同様に、移民は、国民のごく一部分にしか希望を与えないにしても、やはり日本の国民経済がやって行ける限度においては、やった方がいいだろうと思いますね。ことに人口問題という見地からいえば、そういう積極的な方面も強調した方がいい、もちろんそれだけでは解決できないから、他の方法も講じますけれども。

○ 寺尾委員長　結論は当然そこへ行くと思いますが。

○ 永井委員　国民に夢を持たせるんだな。

○ 寺尾委員長　そう。

○ 北岡委員　日本で五反百姓やってるのが、ブラジルで飛行機もってるとかいう話を聞かしただけでも……。

○ 寺尾委員長　ただ、ときどき夢のような話だけ伝ってしまってね。これは非常に危険ですよ。いい

こと、悪いこと、すべてぶちまけて出さなければいけない。

○ 坂本龍起氏　それは私の方で厳重に言っております。非常な苦労がある。それでも行くかということを、よく地方の海外協会で言ってるわけです。ところが、いいことばかり言ったり、金の成る木があるような気持で行ったらたいへんだ、苦しいことは重々話してくれ、こう言ってるんです。

○ 永井委員　ことに今政党が、移民々々と盛んに言っておりますけれども、あぶないですよ。

○ 寺尾委員長　移民というものをプライベートの利益と結びつける、そういうファクターがどこかにあるような気がするんだ。

○ 坂本龍起氏　それはむしろ減って来ておりますね。

○ 小坂委員　移民じゃ儲かるスキはないですよ。一番儲かるのは大阪商船です。

○ 北岡委員　やはり宅クジとか公営住宅のようなものだな。

○ 坂本龍起氏　外務省にもそうですが、われわれの方にも、単独の青年で、外国へ行きたいという、たいへんな傾向が来るんです。今非常に多いです。

○ 寺尾委員長　それだけ今日の国内は、非常に行詰ってる人ですね。見通しだって、ぶちつともよくないですからね。

○ 小坂委員　この間、資料を差上げました。

○ 坂本龍起氏　昔、移民課長をしてるとき、大蔵省に説明するのに、すいぶんやったことがあります。その頃の材料は、古いですけれども、あるはずです。

○ 北岡委員　金額補助なんかしてるのは、ブラジルを取るつもりだろうといって問題を起した。それも排日の理由になって、あれを発表したやつが叱られたんです。

○ 永井委員　昭和十年に人口問題研究会が、政府に建言したが、この印刷物に残ってるんです。今こ

こでやるのと大差ないのじゃないかと思うんです。その中に、移民保護法の改正ということがある人ですが、これは小坂先生、あれからずっと改正しておりますか、

○ 小坂委員　していないです。部分改正をやってるだけです。

○ 坂本龍起君　私らのとき改正したいと言っていましたけれども、下手にやると、外国に変なふうに響くから、それは実際の運用の上においてやりさえすればよいことで、何も改正しなくてもいいんじゃないかということで改正しなかったのです。

○ 永井委員　すると、移民保護官というようなものは……。

○ 坂本龍起氏　あるんです。私が外務省の移民課長をしているとき、私は保護官です。監督官ですよ。

○ 永井委員　今でもあるんですか。

○ 坂本龍起氏　あるはずです。

○ 北岡委員　あなた移民課長ですか。

○ 小坂委員　いえ、いえ　種谷さんです。

○ 坂本龍起氏　部屋とか、いろいろな設備は、今でも大阪商船より、オランダの船の方がいい　同じ値段で旨い物を食わせる。ベットもいい、今オランダ船が日本移民を運んでくれていますが、これは日本の映画館だんかでも、日本の椅子なんか小さいですから、向うは身体が大きいし、ベットもゆったりしているし、広々としています。それで私が監督官で行くときには、船会社にやかましく言って、これでは困るじゃないか。こいをこう改善してもらわなければならぬということをいう。それが外務省の保護官の責任だったのです。それと、移民を食いものにする者がやはりありますから、それの取締りですね。

○ 永井委員　当時は移民屋というものが跋扈していましたよ。

○　小坂委員　その法律では、会社の取締が主眼です。つまり手数料を取って移民を出すという、それを押えるのが主眼だった。

○　坂本龍起氏　それと同時に、海外移住組合法というものができましてね。永井さんが非常に関係されたわけです。日南がその後身なんです。それが海外移住組合法によりまして、各県で県が相当金を入れ、中央では大蔵省が金を入れて、ブラジルに政府が大きな土地を買ったんです。その大きな土地に日本から中流の農家をそこへ入れるということで、そこへいろいろな設備をして、地方の海外移住組合に入ってる。行く人はそこへ入る人です。出資する人です。日本政府の買込んだ土地に入れる。それで海外興業というものがあって、これは棄移民と稱しまして、そこへ無資力の人を連れて行って、向うのコーヒー園の労働に入れたんです。するとブラジルでは、昔は奴隷を使っていたんですから、奴隷を使っていたんですから、奴隷の入っていた労働長屋、そういう所に日本人が入って行くものですから、昔だって文句があったんです。　俺らは奴隷じゃないというわけです。向うとしては、なにも奴隷扱いするわけじゃないけれども、昔のものがあるから、そこへ入れたわけです。そこで何年か働いて金を貯めたわけです。それでコーヒー園に日本人が向いてるかどうかということですが、向うでは非常に所望しておりまして、私のときなどは二万人から送ったわけです。今日でもコーヒー園主は日本人は使いたい人です。けれども向うの政治問題、経済問題として、あまり日本人を入れたくないということで、あまり行けないんですけれども、実際はコーヒー園としては、使いたい人です。

○　永井委員　大体、海外興業というのは、棄移民から出発したんですね。先っ方、日南産業というのは移住組合の後身。

○　坂本龍起氏　そうでございます。

○　山本委員　年二、三万の見通しがあるとおっしゃいましたけれども、そういう程度で、人口問題が

いくらかでも緩和されるというような見通しは、外務省にございますか。

○　坂本龍起氏　外務省としては、人口問題ということも一つの目標でありましょうけれども、やはり日本の飛地というか、日本の一種の海外発展ですか、同時に、昔は、私がやっている頃は帝国主義的な考えは持っていませんでしたけれども、当時の移民関係者の中には、そういうやはり日本の空氣が一種の軍国主義的な、帝国主義的な空氣ですし、海外発展ということでやっていたわけです。私は海外発展ということでやっていたわけです。私は、海外発展が同時に相手国の発展に寄与するということでなければいかぬという建前をとって、移民の奨励をやっておったんですが、今外務省が二、三万を目標にしてやろうということも、やはり日本の利益、日本の経済発展、日本の飛地をつくること、それが延いては人口問題の緩和にも役立つと同時に、昔よりも一層強く、国際協力といいますか。そういうものが、おのおのの特性を発揮して資本を持ってる、資源を持ってる、労力の過剰なもの、そういうものが互いに寄合って、本当に協力することが共存共栄であり、これが世界平和確立の根本になるんだ、そういう一つの理想を、戦争前にやっていたことにプラスしてスタートしてるんじゃありませんか、そうしなければ、また外国から嫌われますからね。

○　山本委員　それはそうでございますけれども、そうすると、心理的の効果だとおっしゃった程度のことで……。

○　坂本龍起氏　そうだと思います。それから農家の二、三男というものは行詰って、外国に出たいという氣持が非常に強いんです。そういう人たちも全部が全部は行けませんけれども、行けるということになりますと、何となく明るい氣持をもつと思います。

○　山本委員　もう一つ、その二、三万という見通しは、だんだん大きくなる可能性はございましょうか。

○ 坂本龍起氏　さあ、どうでございましょうね。

○ 山本委員　日本の能力では、それ以上は困難でございますか。

○ 坂本龍起氏　現状ではね。

○ 小坂委員　五万というのは、なかなかむずかしいでしょうね。昔の一番多い時で、ブラジル移民が二万五千ですものね。近い所で行ける所ができれば別ですが、南米を中心にすると、大体二、三万がいいところじゃないですか。

○ 坂本龍起氏　将来、東南アとか、それから私はフランスあたりで、人口がふえずに、しかもマダガスカル初め、だいぶ外に領土を持っています。そういう所へ話込んで、何万町歩という土地のコンセッションをもらって、そこへ日本人を入れるというようなことも、遠き将来考えられると思いますし、それから世界がほんとに人類のためにつくられているんだ、ひとしく神の子として共存共栄しなければならぬという理想が、いつ実現されるかわかりませんけれども、そういう空気に、われわれひっぱって行かなければならぬと思いますが、大体、従来うまく行ったイタリー移民が、十五万も出てるわけですから、まだふえるかもしれませんが、二万か三万、そこまで行ったら大成功だと思われます。

○ 山本委員　昨年の暮に、世界仏教徒会議がございまして、ビルマでございましたが、そのとき人口問題が出たのでございますけれども、人口問題といえば移民だと思ってみんなが論議して、その辺がうやむやなんです。だから、人口問題の解決にならない移民だったら、もう少し外交的な面から取上げる方がいいんじゃないかと思います。

○ 坂本龍起氏　そう、これは外交問題だと私は思いますね。

○ 山本委員　よくわかりました。どうもありがとうございました。

○ 北岡委員　千五百万ドルは、どこから借りたのですか。

○ 小坂委員　アメリカの市中銀行です。

○ 北岡委員　何々ファウンドとか……。

○ 小坂委員　関係ないです。ナショナル、シティー、バンク、オブ、アメリカです。日本政府の保証だけです。

○ 坂本龍彦氏　吉田さんが向うで東南アの開発問題を持出した人ですね、それと同時に、移民の問題を出したんです。

○ 小坂委員　向うの論調を見ますと、結局アメリカの政府のサゼッションらしいです。今、沖縄の移民を、アメリカがボリヴィアに入れておりますが、これは資金はアメリカが全部持つんです。

○ 寺尾委員長　それでは、今日はこの辺で。ありがとうございました。